コウモリ

作　日比 茂樹　絵　ふじの きのみ

史哉が「永楽荘」という古びたアパートの二階に、母親と二人で越してきたのは、三年生の六月だった。夜中にそれまで聞いたことのなかったような父と母の激しいやりとりがあり、それっきり父は家を出たまま帰らず、一カ月後、母は住み慣れたマンションを出、史哉を連れてこのアパートに落ち着いたのだった。

「これからは、二人だけで生きていこうね」

初めての夜、母は史哉の肩を抱いてこう言った。父を好きだった史哉は、なんと答えていいかわからなかった。

転校先の学校で、クラスの友達がものめずらしげに寄ってきたのは最初のうちだけで、住まいが「永楽荘」だと知ってからは、まるで相手にしてもらえなかった。

「おまえんち、永楽荘かよ。あそこ、ヤバクねぇ？」

「あそこで、首吊りあったの、知ってる？」

「ずっと前、ヤクザがあばれて……」

別にいじめられたわけではなかったが、進んで史哉に近づく子もいなかった。「遊びに来いよ」と誘ってくれる子も、永楽荘に遊びに来る子もいなかった。だから、学校が終わると、史哉はいつもひとりだった。子どもの声はよく聞こえてきたが、ききわけなく泣き叫ぶ声は、入学前のチビばかりのようだった。

永楽荘とブロック塀ひとつ隔てて、小さな公園があった。ベニヤ板を必要な大きさに切っていったら、かどの部分が少し余ってしまった――そんな感じの公園だった。

はじめ、そこが公園だとわからなかった史哉だったが、角のヒマラヤスギの下に、古びた二連の鉄棒を見つけたと